

## 政治イデオロギーの比較分析と環境主義 —環境主義への5つの分析視角—

山口裕司

### <目次>

- 1 はじめに
- 2 政治イデオロギーの発生・衰退・復活
- 3 政治イデオロギーの比較分析
- 4 環境主義のイデオロギー的分析
- 5 おわりに

### 1 はじめに

自由主義、保守主義、社会主義、無政府主義、ファシズム、ナショナリズム、などこれまで様々なイデオロギーが登場してきた。東西冷戦終結後の世界にあって、次なるイデオロギーの登場に関心を抱いているのは果たして筆者だけだろうか。では、そもそもイデオロギーは政治学的にはどのように定義されるのか。「観念形態、意識形態と訳されるこの語は19世紀中期のマルクスに始まる。社会の経済構造（土台）に照応する上部構造の全体をさすもので、まず国家その他の政治構造が、ついで法体系や社会制度、および文化または精神的創造内容としての観念・意識の諸形態がそれである。これらの上部構造は土台によって規定され、それを反映するとされる。しかし社会の変化のなかで、イデオロギー概念も変化し、社会的イデオロギーをへて個人的イデオロギーへ、さらに『イデオロギーの終焉』論へとさまざまな変化を示している<sup>1)</sup>。果たして本当にイデオロギーの時代は終焉するのだろうか。本稿では、リジャイ（Mostafa Rejai）の见解を紹介するが、彼による政治イデオロギーの定義は次の通り。「民衆や社会、正統性や権威に関する、情緒に基づきしかも神話にあふれ行動に関連づけられた信念と価値の体系であり、ほとんどの場合、忠誠や習慣として獲得される。イデオロギーの神話や価値は、単純化され経済的で効率的なやり方でシンボルを通じて伝達される。イデオロギー的信念は多かれ少なかれ首尾一貫し、明白であり、新たな証拠や情報に対して開かれている。イデオロギーは大衆動員、大衆操作、大衆統制のための潜在力が豊富にある。その意味で、イデオロギーは動員された信念体系といえる<sup>2)</sup>。では、類似概念である政治哲学や政治理論と比較してみよう<sup>3)</sup>。政治哲学は、社会に対して広範な目標を設定し、現実を測定できるような尺度としての理念（理想）を確立する。政治哲学はまた、これらの目標や理想の実現に向けてダイナミズムを提供する。政治理論は、分析者に知的活動のパラメーターを提供し、分析者にとって必要な分析道具を与えてくれる。それゆえ、政治理論家と政治レポーターの大きな違いは、政治理論家の作業に不可欠の概念装置にある。なお、政治イデオロギーの重要性には少なくとも2つがある。第1に、政治システムはシステムの構成員に受け入れられたイデオロギー（信念）がないと長持ちしない。第2に、イデオロギーは社会を1つにする。イデオロギーは個人のアイデンティティを促進し、社会的連帯を強めてくれる。

ここで新しい政治イデオロギー候補として環境を重視するイデオロギーに目を転じてみたい。現代の政治イデオロギー文献においては、エコロジズム（ecologism）、エンバイロメンタリズム（environmentalism）、ないし新しい急進主義（new radicalism）として登場してくる<sup>4)</sup>。エコロジズムとエンバイロメンタリズムを区別する論者としてはダブソンが著名である。彼はその利点を次のように指摘する。「エコロジズムの未来を豊かにするために、手始めに、エコロジズムとエンバイロメンタリズムを区別しなければならない。1990年代以降のエコロジズムの役割には、行動主義者のスタミナ源、環境政治の原理主義や

急進主義の不足を指摘する基準、がある<sup>16)</sup>。ただし、世界の政党システムを概観すると環境政党の勢力はまだまだ微々たるものであり、その意味からも、エコロジー運動とエコロジズムはまだ形成期にあるといえる<sup>16)</sup>。

本稿の目的は、東西冷戦構造の崩壊と運命をともにしているかのようにみえるイデオロギー対立の崩壊を検討することにある。本当にイデオロギーの時代は終焉したのだろうか。結論を先取りするが、実際にはイデオロギーの時代は依然継続中であり、時代は新たな問題を解決する新たなイデオロギーの出現を待望している。そこで本稿では、以上との関連で次の3点を検討する。①過去の政治イデオロギーの歴史的検討、②政治イデオロギーの5次元による比較検討、③新たなイデオロギー候補としての環境主義(environmentalism)の検討、である。

## 2 政治イデオロギーの発生・衰退・復活

### (1) イデオロギーの発生

イデオロギーはどのように発生するのだろうか。リジャイの見解を紹介する形でみていきたい<sup>17)</sup>。イデオロギーの台頭は19世紀までさかのぼれる。それは次のようなものと符合する。すなわち、フランス革命、都市化や産業化の進展、輸送やコミュニケーションの発達、人間生活の非人格化・匿名化、精神的・情緒的ギャップの発生、である。政治イデオロギーは様々な理由から産業社会以前の農業社会には発生しなかった。当初はそれに先行する条件はまだ生まれてなかった(例：イデオロギーの大衆基盤の欠如)。さらに前産業的・農業的社会は「伝統の鉄の手」によって支配されていた。上意下達の絶対的統制は底辺からのいかなる意見も認めなかった。結局、こうした社会にあっては、ほとんど宗教がイデオロギーの機能的代替物である。イデオロギーは浮沈を繰り返しつつ、その強さの程度を変えながら、およそ200年に渡って、欧米諸国を支配してきている。一方で、アジア、アフリカ、ラテンアメリカでは、イデオロギーは第1次大戦やロシア革命の後に登場し始めた。しかし第2次大戦後になってはじめて、イデオロギーはその繁栄を迎え、発展途上諸国、植民地の人々を操り、魅了し、国民的かつ革命的運動の起爆剤になった。特に、第2次大戦とその帰結は植民地諸国や発展途上諸国の好戦的イデオロギーに新しい息吹を与えた。巨大帝国の崩壊は、白人打倒不可能の神話を覆し、白人が絶対的ではないことを示したのである。初期の日本軍の勝利は、白人以外の人種でも白人を打倒できることをさらに強調した(1905年の日露戦争)。反西洋的ナショナリズム運動および革命運動は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカで急成長を遂げ、そうした運動は皮肉にも、西洋諸国で教育を受けた人々によって導かれた。戦後の独立ないし革命運動の起源は、次のような人々にさかのぼれる。すなわち、ロンドン、パリなどの欧州都市で会合を開き、構想を練り、組織化を推進し、その後そうした運動を本国に持ち帰った植民地出身の学生や亡命者である。独立ないし革命運動が成功し植民地が独立を勝ち得ると、いわゆる伝播効果が始まる。他の諸国の期待が高まり、意識化過程が加速される。たとえば、中国革命の成功はアジア諸国の畏敬の対象となり、キューバ革命の成功はラテンアメリカにとってそうだった。同様に、1957年のガーナの独立、62年のアルジェリア革命の成功は多くのアフリカ諸国での独立ないし革命運動を鼓舞した。上述のプロセスのなかで、2つのイデオロギーが植民地や発展途上諸国の政治運動を支配したとしても不思議ではない。①ナショナリズム(統一・主権・独立を約束するイデオロギー)。②マルクス主義(貧困・病苦・抑圧・搾取からの解放を約束するイデオロギー)。実際、ナショナリズムとマルクス主義とが合体すると、戦後最も爆発力のある政治イデオロギーとなった。

### (2) イデオロギーの衰退

次にイデオロギーの衰退過程をみてみよう<sup>18)</sup>。欧米の先進工業社会の発展は検討に値する。第1に、第2次大戦後の20年間における、こうした諸国に起こった前例のない経済成長は「豊かさの時代」を産みだし、「イデオロギーの衰退」をもたらした。学者や知識人はイデオロギー的衰退の仮説を先進産業社会で検

証した。一般的にこの仮説は広く妥当した。イデオロギーの衰退仮説は、2つの前提のうちのいずれか1つを引き合いに出す。①イデオロギー的目標を設定する究極性の相対的变化。②イデオロギー的目標を追求する情緒的強さの相対的希薄化。この仮説は国際政治と国内政治の双方に関係する。国際的レベルで見ると、衰退の仮説からは次のことがいえる。すなわち、極端なイデオロギー（マルクス主義など）は、そのグローバルな目的を和らげると同時に、これらの目的を追求する強さをも和らげた。国内政治では、この衰退仮説は次のことを示唆した。国内政策をめぐる政党間の従来の激しい競争が和らげられたこと、左右のイデオロギーがある程度合体して共通の社会問題に一致して攻撃を加えたこと、政治的亀裂や葛藤が相対的に希薄化したこと、である。しかしこの仮説はイデオロギーの全体的消滅を指摘しているのではない。イデオロギーの終焉という概念は不適當であり、適用のミスであった。この仮説（イデオロギー衰退）の意味は、黙示録的・全体的・極端主義的イデオロギーの終焉だった。これはイデオロギーの衰退に関する混乱の要因の1つであるし、それは2つの異なったやり方で仮説を設定した研究者にその責任がある。①イデオロギーの衰退、②（極端主義的）イデオロギーの終焉。イデオロギー衰退の仮説は、一定の明白な制約のなかで述べられている。仮説は時間が限定され、空間も限定されていた。この仮説は、戦後のイデオロギー政治だけを含むという意味で時間的限定があった。またこの仮説はもっぱら先進・産業・西洋社会に該当するという意味で地域的な限定があった。次に、第2の前提にはさらなる検討が必要となる。衰退仮説はそれが十分に通用するための特定の条件を要求する。これらの条件は、西洋産業社会において広く実現され、アジアの一定の諸国で実現化の過程にあり、その他の発展途上地域ではほとんど欠如していた。これらの条件は何であったのか。国際的には2つの現実が有意性をもつ。①ファシズム、ナチズム、人種主義、共産主義などのイデオロギーの相対的低評価。②冷戦の終焉と共産主義体制の崩壊。最も重要な内部的变化は、経済的發展とそれに付随する結果に関連する。すなわち、全般的な豊かさの増大、教育やマスコミに対する接近度の高まり、社会的問題を解決するための科学や専門家への依存増大、階級対立や政党対立の希薄化、下層階級による経済的政治的市民権の獲得、膨大な同質的専門管理職の中間階級の登場、自由放任的資本主義から福祉国家への移行、政治問題を解決するための安定した政治過程の制度化、である。イデオロギーの衰退仮説は欧米の既成政党（リベラル、保守、社会主義など）だけでなく、そうした諸国の共産主義政党をも特徴づけた。フランス、スペイン、イタリアなどの共産主義政党は、議会制度の合法的かつノーマルな要素として自覚を確立した。それゆえ、その革命的レトリックにもかかわらず、そうした政党の目的は、旧体制を転覆させることではなく政治的パイの分け前に多く与ることだった（議会での議席獲得など）。実際、1968年5月のフランスでの闘争時、学生革命家は共産党を改革主義組織ないし旧体制の擁護者と非難した。彼ら革命家は、共産党に対して反動的、反革命的、時代錯誤的という烙印を押し、さらに急進的なオルタナティブを要求した。学生の非難には根拠がある。すなわち、フランス共産党は穏健な学生を支援し、大学や政府当局と協力するように強く求めた。

### (3) イデオロギーの復活

最後に、イデオロギーはどのように復活するのだろうか<sup>9)</sup>。イデオロギー衰退の仮説は、ここ数十年の経緯によって立証されたりそうでなかったりした。この辺の事情はアメリカの例で明白となる。アメリカには公民権運動、学生運動、平和運動（反ベトナム、反核）、フェミニズム運動などが登場した。イデオロギーとの関連では、こうした運動に驚くべきものはない。強いて言えば、60年代の緊迫した環境は、民主社会を求める学生組織、ウェーザーマン、ブラックパンサーなどに関わる様々な急進的イデオロギーを台頭させた。対照的に80年代の緊迫感のない環境は、古い社会的・政治的・軍国主義的・宗教的価値や伝統を蘇らせようとする新保守主義を登場させた。90年代には、行動主義的かつ穏健な政治への回帰が見られたが、右翼や宗教的反動も生まれている。結局、19～20世紀にイデオロギーを台頭させた経済的・産業的・テクノロジー的状况が変貌するにつれ、イデオロギーも変化した。状況が変化するにつれ、イデオロギーもそれに対応する修正や調整をおこなった。また、新しい状況は新しくかつ適切なイデオロギーの登場のために舞台設定をした。人間生活の他の多くの側面と同様に、イデオロギーは常に変化を遂げるわけであり、長期間一定であることはない。イデオロギーがノーマルな社会現象である限り、イデオロギー

は常に人類とともにあり続ける。当然ながら、良き時代は穏健で柔軟なイデオロギーと符合し、悪しき時代は好戦的で硬直したイデオロギーと符号する傾向にある。

### 3 政治イデオロギーの比較分析

#### (1) イデオロギーの5つの次元

まず、イデオロギーにはどのような特質があるのだろうか<sup>30</sup>。イデオロギーの定義は多様である。社会学の定義、心理学的定義などさまざまである。定義の優劣は付けがたく、その有効性は学問的議論で吟味される。定義上の優位性は現象に関するより適切で、鋭く、説得力ある説明がどの程度なされるかによる。イデオロギーに関する概念は、一定の明白な基準に合致しなければならない。それは中立的かつ正確でなければならない。イデオロギー概念はまた機能的で、現実の世界に適用できなければならない。したがって、イデオロギーの定義を無理に行うより、イデオロギーの主たる次元ないし構成要素を明らかにする方が賢明である。それによってはじめに、政治的イデオロギーを分析し比較する枠組みを設定できる。

イデオロギーの概念には5つの重要な次元がある。①認識的次元（知識と信念）、②情緒的次元（感情と情緒）、③評価的次元（規範と判断）、④計画的次元（計画と行動）、⑤社会基盤的次元（支持団体と支持集団）。それぞれの次元を考察する前に、3つの但し書きを述べたい。第1に最初の3つの次元はパーソンズの文化の概念の応用である。第2に、5つの構成要素は相互に排他的でない。すなわち分析的にはそれらの要素は別個のものであるが、ある程度重複している。第3に、すべてのイデオロギーは多かれ少なかれ5つの次元を共有しているが、あらゆる次元でその要素が強いとはいえない。

では、各次元を具体的に紹介してみよう<sup>31</sup>。

①認識的次元：認識的次元は、イデオロギー的世界観に該当する。すなわち政治や社会に関する見方、社会的政治的現実に関する認識である。この次元は最も包括的であり、他の4つの次元を射程に入れている。イデオロギーに関する世界観は、知識と信念に関連する。知識は科学的検証に従う。信念は論理的に一貫していないか、もしくは科学的に確立されていない。信念は社会化・習慣・反復をベースにして受け入れられ支持される。信念と現実の間には必ずしも首尾一貫性はない。この議論を敷衍すると、すべてのイデオロギーは歪曲・幻想・神話をもつ。イデオロギーは大なり小なり神話を有しているが、しかし神話は有効である。共産主義者は階級なき社会、労働者階級の団結といった神話をもつ。ナチスは卓越した民族とか超人的指導者といった神話をもつ。こうした考え方は神話に否定的でもなく軽蔑的でもない。実際すべての社会は神話に基づき神話にあふれている。我々は神話が必要であり神話なしには生きられない。神話は我々のために現実を和らげてくれ、我々をして自分自身や社会に関して良い感情を抱かせてくれる。神話の真偽にかかわらず、神話はまさしく受容されている。その受容の理由は、神話が我々に道徳的教訓を与えてくれ、我々の思想や行動を導く手助けとなっているからである。ここに神話の重要さがある。神話はまた単純化を行う。思想の体系は現実に関する単純化、現実に関する解釈、に依存している。コミュニケーションは単純化の実践でもある。要するに、神話のもうひとつの機能は我々のために現実を単純化し、現実を即時的に伝達することである。概して、単純化はシンボルの使用によってなされる。あらゆる政治イデオロギー（思想体系）は、シンボリックな概念やコミュニケーションに関与する。シンボルは2つの形態をとる。言語的形態と非言語的形態。言語的シンボルには「法と秩序」があり、非言語的シンボルには国民的記念碑、国民的休日（祝日）などがある。ここには国民的価値を具体化し強い国民意識を喚起する作用がある。いずれにしろ、シンボルは幅広い意味を束ね、その意味を即座に伝達する。

②情緒的次元：神話やシンボルの議論は、第2のイデオロギーの次元（イデオロギーの情緒性）に連動する。この次元はかなり自己説明的であり、さらなる説明を必要としない。もし政治的イデオロギーが成立可能で持続的であろうとすれば、イデオロギーは人々の感情に訴えねばならない。したがってあらゆるイデオロギーは、内実・接近・機能においても情緒的である。どのイデオロギーも合理性の要素とならんで情緒性が存在する。イデオロギーの違いが生まれるのは、両者（合理と情緒）の強弱のせいである。フェ

シズム（ナチズム）のイデオロギーは情緒的であり、共産主義は合理的で計算され、民主主義は最も合理的なイデオロギーである。しかし、合理的なイデオロギーでさえ、ノーマルな時代、ノーマルな条件でのみ合理的である。国家的危機はイデオロギーを情緒的にする。アメリカの人質事件がその好例。重要な問題は、ノーマルな状況では我々は信念体系にいかにか厳格（柔軟）であるかである。開かれたイデオロギー（信念体系）と閉じられたイデオロギー（信念体系）の区別が必要となる。開かれたイデオロギーは、新たな証拠や情報を許容しその過程における修正や変化を容認する。閉じられたイデオロギーは新たな証拠や情報を蓄積しないと同時に、決まり文句を使うことに終始する。あらゆるイデオロギーのなかで最も明白な特徴は、人間の情念に訴えることであり、それは情緒的な反応を惹起する。それゆえ次のことを理解するのが肝要である。イデオロギーはそれ自体を無理強いできないと同時に、制裁や権力のみによつて依拠できない。人々を自発的にイデオロギーと一体化させ、イデオロギーへの支持を拡大させなければならない。アイデンティティーの感覚は、個人的利益と国家的威信が合体したときに強化される。

③ 評価的次元：イデオロギーは規範的な要素を体现する。とりわけイデオロギーは2つの方法で価値判断をおこなう。すなわち、ネガティブな方法（既存の社会的政治的体系の告発）とポジティブな方法（社会的政治的改造に必要な規範体系の提示）。イデオロギーは初期段階では、既存社会を腐敗した社会、非道徳的社会、改革不可能な社会として批判する。イデオロギーは道徳的原理原則に訴えることでそうした批判を行う。精神的怒りはどのイデオロギーにも不可欠である。既存社会に対する攻撃は、より高度な原理原則に訴えることで行われ、合理化され正当化され威厳を持たされる。たとえば、アメリカの独立宣言の場合、ジェファソンは、イギリスとの関係を絶つ宣言を行い、イギリスが13州で行ってきた悪行を告発し、自然や神の法に訴えることで独立の必要性を主張した。そうした宣言は植民地社会の現実や制度に関するネガティブな声明であった。ジェファソンは、イギリスはアメリカの立法・司法制度を破壊し平和時にも常備軍を置いたと述べる。これらはイデオロギーのネガティブな価値判断に属する。イデオロギーのポジティブな価値は、自由・平等・友愛・人間性などの重要な規範に関わる。規範的な命題は実際上の声明として提起される。アメリカの独立宣言の場合、ジェファソンはそうしたポジティブな目標を提起している。すべてのイデオロギーは「よき社会」への移行を目指し、究極的価値や最終的目標を有する。たとえば、マルクスの階級なき社会の考え方など。イデオロギーは乏しい社会資源（権力や富）の配分に関する声明を行い、リーダーシップ、権威、正統性などの問題をも包含する。それゆえ政治的イデオロギーは、次のような問題にまず焦点が合わされた信念や価値の体系といえる。すなわち、いかなる基準で競合する利益や価値が調整されるべきか、その権限をだれが持つのか、など。

④ 計画的次元：イデオロギーの価値や目標は、包括的な行動計画で具体化される。イデオロギーは信念・規範・思想が行動に関連づけられた体系である。イデオロギーは価値体系であるだけでなく、そうした価値の実現へ向けて特定の行動を求める。原則と行動の一致の要求はイデオロギー的規律や統制のための基盤として役立つ。イデオロギーの実行・計画は現状の維持・恒久化に向けて行われたり、現存する社会秩序の改革に向けて行われたりする。必要な変化はその性格上、改革主義的であったり急進主義的であったりする。改革主義的・平和的・漸進的变化は、民主的イデオロギーの手法である。すなわち我々は目的を達成するために人々を説得し教育しなければならない。急進的・暴力的・急激な変化は全体主義的イデオロギーの手法である。たとえばナチズム、共産主義など。国家的偉大さ、民族的卓越性、リーダーの絶対性を強調することによって、ナチスはベルサイユ条約を破棄し欧州征服を推進した。共産主義者は、土地・平和・食糧を約束することでロマノフ朝の支配に終止符を打った。共産主義者はまた、短期・中期・長期の目標を打ち出している。短期的にはブルジョアジーの打倒、中期的には社会経済的再建（改造）、長期的には階級なき社会の実現、である。

⑤ 社会基盤的次元：イデオロギーは社会集団・階級・民衆・民族と必然的に関連する。イデオロギーがイデオロギーであるためには大衆的基盤が必要である。イデオロギーは大衆に理解できるような方法で提示されねばならないし、こうした理解があつてはじめて目標の実現に向けた行動を起こさせることができる。周知のようにイデオロギーは動員された信念体系であり、こうした文脈では、個人的イデオロギーと政治的イデオロギーを区別できよう。この区別の説明には、2人の哲学者であるプラトンとマルクスの比

較が適当である。プラトンの政治哲学は個人的分野に留まる。すなわち彼の哲学は比較的少数の哲学者や知識人の対象となるだけであり、それゆえ彼の哲学は大衆に訴えるものではない。彼の哲学は社会運動の拠り所ではないので、プラトン主義は特定のイデオロギー的意味がない。マルクス主義は確かに哲学体系ではあるが、それは潜在的なイデオロギーでもある。マルクス主義は大衆を動員するのに役立ってきた。マルクス主義はイデオロギー運動の基盤であり、大衆行動の原動力でもある。イデオロギーの動員機能は組織なしには不可能であり、組織は信念と行動を結びつけるものである。しかし組織は自然発生的には発展しない。ましてやその組織は大衆によっても組織化できない。組織はエリート概念であり、エリートの機能である。そこでエリートのイデオロギーと大衆のイデオロギーを区別する必要がある。エリートの信念体系は包括的で明白で一貫性がある。大衆の信念体系は部分的で明白でなく一貫性もない。換言すれば、エリートは常に自己の信念体系の包括的声明を行う立場にある。通常大衆はこうした能力がない。エリートと大衆の区別は面白い問題を提起する。たとえば、エリートは民衆をより高度な目標や目的に動員するためにどの程度イデオロギーを利用するのか。あるいは、イデオロギーはエリートの個人的野望や動機を実現するのにどの程度役立つのか。こうした問題に対する解答は困難だが、操作や統制の可能性はもちろんあらゆるイデオロギーに存在するし、しばしば実施される。いうまでもなく、操作の形態やその程度はイデオロギーによって違う。極端なイデオロギーほどその程度が強まるし、その中間のイデオロギーはその程度が弱まる。

## (2) イデオロギーの台頭

イデオロギー台頭の過程をみてみよう<sup>10</sup>。イデオロギーはここ2世紀の間だけ存在する。実際、1789年のフランス革命は一般的にイデオロギーの台頭と符合する。多くの変化・出来事・発展はそれぞれが合体しつつ、政治理論の台頭に非常に役立つ環境を生み出してきた。こうした環境は19世紀以前の農業的・絶対主義的時代には存在しなかった。フランス革命がはじめて古い政治の土台を粉碎し、新しい政治の時代を切り開いた。古い政治は王族・貴族・僧侶による政治であり、新しい政治は人民・大衆の政治である。フランス革命以前には、あらゆる主要な決定は王やその側近によってなされるか、時には3部会を開いてなされた。3部会は3つの身分から構成された。僧侶、貴族、平民である。3部会はいわば諮問機関であり、宣伝手段であったが、代表機関ではなく、君主の要望に応じて開催された。3部会が最後に開かれたのは1614年であり、1789年に、革命的大衆の圧力を受けて3部会が再開された。その後、第3身分(平民・中間階級)は3部会の廃止を求め、フランス国民議会にとって代わらせた。自由・平等・博愛はフランス革命の偶然のスローガンではなかった。成長しつつあった中間階級は、新しい権利やアイデンティティを要求していた。それらは他の欧州諸国でも同様に行われたことである。フランス革命の主要なドキュメント、すなわち仏版独立宣言は人間と市民の権利の宣言であった。この宣言は多くの点で特筆すべきものである。2つの点を特に指摘したい。第1に、今後は人間が人と市民として扱われるべきというそのタイトルに見られる主張である。それ以前は人間はより低い存在と考えられてきた。すなわち君主の下僕と。下僕は義務だけもち権利はなかった。市民は義務と同様権利ももつ。第2に、このドキュメントは次のように宣言する。今後は主権は人民にあり、国王でなく人民が権力や権限の最終的担い手であること。まさしく民主主義革命である。君主制は打倒され、ルイ16世とその妃はギロチン台の露と消え、貴族制は廃止され、教会はその権限を奪われた。すべての伝統的制度は弱体化された。それに代わって、人民が台頭し自由・平等・友愛・市民権を要求するに至った。14世紀頃、中間階級は町や都市の発達、商業や工業の台頭、都市化や工業化とともに、次第に台頭してきていた。当初は、中間階級は経済的パイの配分に多く与ろうとした。経済的保障を獲得するにつれ、中間階級は政治的権利を強く主張し始めた。したがって、1600年代のイギリス、1776年のアメリカ革命、1789年のフランス革命は、3大民主革命といえる。19世紀の進展とともに、大衆の参加現象が強まり下層階級にまで広まった。3つの要因がこのプロセスで重要な役割を演じた。第1に、労働組合主義の台頭が労働階級の経済的地位を向上させた。第2に、労働者政党は欧州諸国の議会に進出し、下層階級からの政治的代表者を送り込んだ。第3に参政権が徐々に広まり、そのことが少なくとも原則上は人民の政治参加を最大限に保障した。結局、

19世紀になると中間階級は政治に関与するようになり、19世紀末には、労働階級は政治にかなり参入するようになった。19世紀以前にすでに始まっていた都市化は、この時期に新たな高みに達した。都市化は多くのことを意味する。ここで特に重要な点は、農村から都市へ、周辺から中央へといった人口移動のパターンである。相対的に狭い地域に人口が集中することで、都市化はイデオロギーの大衆的基盤となり、イデオロギー的運動の主たる構成要素となった。都市化と産業化という2つの力が結合して、もうひとつの帰結を伴った。すなわち、人間生活の複雑化、生活の孤立化、生活の非人格化である。コミュニティや直接的ふれあい関係などの理念や理想はすたれた。それらに代わって、人間の無力感、根無し草、匿名性、疎外などの意味合いが高まった。それゆえ、精神的ないし情緒的ギャップは新たな結束源、新たな帰属源、新たな安定源、新たな忠誠心を要求した。もちろんイデオロギーはこうした根本的な人間の要求に対して孤立した人間を非常に大きな全体の一部にすることでそうした要求に応える。19世紀の一連の進展は注目に値する。すなわち識字率の向上、教育的重要性の認識、欧米での公立大学制度の登場など。さて教育の向上には多くの意味合いがある。重要な点は無学は結局政治的な追従に寄与するということである。いったん無学の前提が崩れると、人間はその追従的地位を打破し始める。そうした傾向は行動主義へ向かい、従属的地位に甘んじなくなる。無学は追従に役立ち、学問は反乱・反抗に寄与する。これは洋の東西を問わず真実である。教育は地球規模の革命推進力である。科学やテクノロジーの進歩はイデオロギーの急速な普及を可能にした。イデオロギーは移動しやすくなり、国境を容易に超えられるようになった。1つの最終的発展がある。経済的発展、都市化、産業化、教育・科学・テクノロジーの進歩は、すなわち近代化である。近代化の主たる随伴物は世俗化である。19世紀初期に、宗教は民衆に対する支配を喪失しはじめた。換言すると、世俗化はもうひとつの情緒的・精神的空虚さを生み出した。そうした中で、イデオロギーは信仰心のない人々に対するオルタナティブとしてこうした空虚感を埋め始めた。

### (3) イデオロギーの機能

イデオロギーにはどのような機能があるのだろうか<sup>4)</sup>。第1に、イデオロギーは社会的政治的現実に関するパースペクティブを提供し、その信者に対してそのパースペクティブに合致したやり方で行動するよう要求する。イデオロギーは我々に政治的現実を説明し、周囲の曖昧な世界に意味を与え、生活に秩序を与える。イデオロギーは行動の基準を示唆し、我々の言動のための根本原理を提供してくれる。もし我々が民主主義、ナチズム、共産主義の信奉者であれば、それぞれのイデオロギーの理論と矛盾しない行いをすることが予想される。第2に、イデオロギーは個々人にアイデンティティーや帰属感を提供する。イデオロギーは個々人をより広い全体に同化させる。イデオロギーは我々の不安や不安定感を打ち消す。こうした機能は、大衆社会、都市社会、産業社会において特に重要である。第3に、集合性の観点からは、イデオロギーは社会的連帯、社会的結合を高めるのに役立つ。ひとつには、イデオロギーは集団を束ね、集団に一体感を与えてくれる。もうひとつは、イデオロギーは集団の目標・価値・目的を合理化し正当化してくれる。イデオロギーは、集団に正統性や体面性を与えることで、集団の自己イメージだけでなくその外見的イメージをも改善する。第4に、イデオロギーは楽観主義を引き起こす。イデオロギーは希望やユートピアを与える。そうした楽観主義は人間生活にとって重要であり、イデオロギーの大衆への訴えにとっても重要不可欠である。人間は常によりよい生活を求める存在である。第5に、イデオロギーは政治体制を支持し維持するのに貢献し、そうした体制に挑戦し破壊するのにも役立つ。この意味で、われわれは現状維持のイデオロギーと現状変革のイデオロギーの区別ができる。しかしイデオロギーは同時に双方の機能を果たせる。したがって、たとえば、共産主義イデオロギーは既存秩序の破壊を求めると同時に、もうひとつの秩序の構築をも求める。ドイツの社会学者マンハイムはイデオロギーとユートピアを区別した。彼の見解では、イデオロギーは政治体制を支持し正当化する観念体系であり、ユートピアは政治体制に反対しその破壊を要求する観念体系である。しかしイデオロギーは同時にこれら2つの機能を果たすことができる。マンハイムの言葉を使えば、イデオロギーはイデオロギーでもありユートピアでもある。第6に、あらゆるイデオロギーは、民衆の操作や統制の手段として役立つ。一国の指導者はコミュニケーション技術の進歩を利用して大衆を誘導できる立場にある。第7に、イデオロギーは自己維持の機能を果たす。イ

デオロギーは不滅であるためには、時代や状況の変化に遅れをとってはならない。デオロギーは時代の要求や要請に応じてその主義や原則を変えなければならない。こうした絶えざる適応過程を維持できるデオロギーは生き残れるが、そうした適応能力のないデオロギーは早晩消滅するかもしれない。

#### 4 環境主義のデオロギー的分析

##### (1) 環境主義とは

環境主義 (environmentalism) は次のものを擁護するデオロギーおよび運動である<sup>94</sup>。すなわち人口統制、天然資源の保全、汚染の防止、土地利用の統制、人間生活の質や永続性の保持、である。環境主義はその支持者や社会集団に対して経済的利益を最大化しないという点に特徴がある。環境主義は無制限の経済発展に対する制限を求め、そうした制限の普遍的適用を求める。環境主義の第1の原理は、地球全体をコモンズ (共有財産) とみるべきということ。それゆえ環境主義デオロギーの基本要素は、人口統制、環境保全、汚染 (公害) の3つの問題である。これら3つの問題はすべて自然やエコロジーに関する理解や評価に依存しており、問題解決には人間社会と生態系の関連の深さを理解すべきである。そして環境主義者は次のことを認める。すなわち、あらゆる経済的利益はある程度の環境的損失を伴うこと、そうした損失の総額は特に豊かな社会において経済的利益を凌駕すること、である。環境主義者は、物質やエネルギーの利用の増大なしに人間の発展の可能性を展望する。一言でいえば、環境主義運動の主要な課題は次のものである。①人口統制、②原生自然、絶滅危惧種、野生生物生息地などの保存、③汚染 (公害)、④全人類に対する十分なる食糧供給、⑤長期的エネルギー供給、⑥核戦争の脅威、この6つである。

環境主義の台頭を促した要因には次の6つがある。①核戦争と核汚染の脅威。これによってそれまで活動的でなかった多くの団体が刺激を受けた。②戦後の経済的豊かさ。これによって物質主義への関心が薄れ、生活の質が注目されるに至った。③60年代。この時期に行動主義的文化が高まり、特に若者や女性、マイノリティーの人々が社会の問題を解決すべく行動を起こした。そうしたことが60年代に起こった。④環境問題に関する科学的知識。たとえば、1989年のアラスカ湾沖合いでのエクソン・バルディーズ号の原油流出事故に関するマスコミ報道によって科学的知識が普及した。⑤アウトドア・レクリエーションの急速な増加。これによって多くの人々は直接環境の悪化に接し環境保全に関心を深めるに至った。⑥環境団体の活動で幅広い環境問題に関心が集まり、それによって環境運動を支援する動きが非常に高まった。

##### (2) 環境主義の政治的立場

環境主義の政治的立場はどのように規定できるだろうか。特に、アメリカに焦点を当ててみたい<sup>95</sup>。環境主義は私益追求のデオロギーではない。私益追求はアメリカ社会に深く浸透しているので、環境主義は大衆の強い支持を容易に得られない。環境主義は経済的に安定した人々に最もアピールし、経済的に不安定な人々にはアピールしない。しかし核汚染や他の環境汚染が身近なものになるにつれ、環境主義はどの階層にも広く浸透した。あらゆる人間が必ずしも自然保護のための時間や財力を持っているわけではないが、環境主義は広範な政治的訴えを展開した。環境主義の主な主張は、本来最も理解があり知識のある人々に受け入れられている。これらの主張は次のようなものである。①あらゆる生命体の尊重。②他の生命体との関係で、グローバルな生態系との関係で、人類を位置づける謙譲の精神。③人間の生活や健康の質への配慮。④ナショナリスティックかつ孤立主義的パースペクティブでなく、グローバルなパースペクティブ。⑤政治的分権化や人口の分散化への選好。⑥長期的な展望。⑦地球上の生物の生き残りに関する緊急性の認識。⑧人間の要求に抗した浪費への嫌悪。⑨近代性を拒否しないような形での単純性の評価。⑩季節・気候・自然の美学的評価。⑪人間的努力における自立性や自己管理の追求。⑫民主的で参加的な実践的関与、である。こうした主張を前提とすれば、環境主義は政治的右翼からの反発にさらされる。この反発は環境主義をして穏健左翼の進歩的勢力との連携に向かわせる。欧米で環境主義を唱える人々は、その多くは穏健な政治的左翼に共鳴する。保守的な環境主義は理論的には可能であるが、実際には保守的環境



主義は存在しない。環境主義と穏健左翼の最も明白な共通点は、統制なき経済的拡大を促進しないという立場で市場経済に介入することである。さらに、穏健左翼は拡大する社会的・民衆の利益の配分を伝統的に促進してきた。

以上の環境主義の政治的立場を踏まえて、さらに自然観、人間観、科学・テクノロジー観、生産・経済観、政治観といった5つの観点から環境主義（緑の価値観）と非環境主義（既存の価値観）を比較したのが、表の「緑の価値観と既存の価値観の対比」である<sup>98</sup>。ただし、この緑の価値観には、ダブソンのいうエコロジズムとエンバイロメンタリズムの双方が混入している。

(表) 緑の価値観と既存の価値観の対比

既存の価値観	緑の価値観
《自然観》	
①人間は自然から分離 ②人間のために自然を利用し支配できる(すべき)  ③人間は自然を開発し利用するために自然法則(科学的法則)を利用できる(すべき)	①人間は自然の一部 ②自然の人間に対する価値とは無関係に自然それ自体を尊重し保護しなければならない。人間は自然と調和を保って生きなければならない ③人間は自然法則に従わねばならない(地球が養える人口には限度があるという収容力の法則、など)
《人間観》	
①人間は攻撃的かつ競争的 ②人間社会は自らをヒエラルヒー的に組織する(しなければならない) ③人間の社会的地位は物質的所有によって測定できる。人間の所有物を多く生産することで、複雑なテクノロジーを発明することで、社会は進歩する ④論理的かつ合理的思想は人間の感情や直観よりも妥当性と信頼性がある。事実や科学的証拠のみ信頼できる	①人間は協調的 ②社会的ヒエラルヒーは不自然で望ましくなく回避できる ③生活の精神的特性や情愛の関係は物質的所有より重要。人間は物質的所有を拒否し質素に生きるべき ④感情や直観は他の認識方法と同様に重要性と妥当性がある。客観的「事実」など存在しない
《科学およびテクノロジー観》	
①科学やテクノロジーは環境問題を解決しうる。そのために科学やテクノロジーを常に改善する必要がある ②社会的・経済的変化をもたらすのはテクノロジーの進歩である。人間はテクノロジーの進歩を抑制できない ③大規模な「高度」テクノロジー(原子力など)は進歩の証明 ④問題の解決には問題を個々の構成要素に分けた	①科学やテクノロジーは頼りにならない。環境問題を解決する別の手段を見出さねばならない ②人間は社会や経済を自由に変えることができる。テクノロジーは主人ではなく召使いたるべき。人間に有害なテクノロジーを持つ必要はない ③中規模の、適切な、民主的管理のテクノロジー(太陽熱、風力などの再生可能なエネルギー)は進歩の証明 ④問題の解決には各部分を全体の中で捉らえ各々

分析が必要

⑤自然の理解には自然の基礎的要素を知り同要素を規定する力を知る必要がある

を関連づける統合作業が必要

⑥全体論の見方が必要。自然の各部分の合計以上のものが自然（と社会）には存在する

《生産および経済観》

①商品やサービスの生産目的はもっと多くの商品やサービスに投資する資本を生み出すこと。それにより結局あらゆる人間が利益を享受する  
②商品やサービスの生産費用がその売価に比べて安いほど生産過程は経済効率が高い

③経済成長は望ましく永遠に持続可能。経済成長は環境を破壊するとは限らない

④成長の最大化のために再利用や公害規制に制約を設けねばならない。さもないと産業の競争力はなくなる

⑤経済計画は5～10年以上先は念頭にない。なぜなら投資家はその時までには相応の収益を期待する

⑥国家と地域は両者間の交易関係を樹立することで発展し進歩する

⑦中央集権的管理ないし生産ラインの大規模生産は望ましくかつ効率的

⑧生産の機械化や自動化は望ましくかつ効率的。それにより退屈な仕事が排除される

⑨完全雇用が理想

①商品やサービスの利潤率を度外視して社会に必要な商品やサービスを生産すべき

②経済効率性は次の基準で測定されるべき。どれほど多くの仕事（満足感があり環境に優しい）が生み出されるか、人間の物質的要求（食料、衣料、輸送、コミュニケーション、余暇）がどれほど資源の枯渇に配慮しているか、という基準。社会のおよび環境的損害は経済的には非効率的

③無制限の経済成長は望ましくない。そうした経済成長は限りある資源を枯渇させ汚染を生み出すので持続不可能

④あらゆる生産は原材料を最小限に利用しそれを再利用しなければならない。結局この方が効率的。地域経済があれば競争力を懸念する必要なし

⑤経済計画のための時間的尺度は数百年単位であるべき

⑥国家と地域の交易関係は減少すべき。目標は地域やコミュニティの自立にあるべき

⑦地域的管理ないし手工業による小規模生産は望ましくかつ効率的

⑧労働（labour）を仕事（job）に変え仕事を充実させることが望ましくかつ効率的。人間は満足できる仕事を必要とする

⑨だれでも仕事をもつべきだが、これは従来型の仕事だけを意味していない

《政治観》

①国民国家は最重要の政治的単位

②環境問題を解決するために人間の社会経済政治システムを変える必要はない。ただしそのシステムを規制し自由市場に介入する必要がある

③環境主義者は人類を前産業主義的の石器時代へ回帰させようとする。いわばロマン主義的の田園構想への回帰

④環境的意思決定は環境問題に最も相応しい専門家に最終的に委ねねばならない。政治家は科学者から助言を受けるべき

①地方のコミュニティは国際的コミュニティの一部として最重要（地球規模で思考し地方レベルで行動する）

②環境問題を解決する唯一の方法は大規模な社会経済政治的改革である。人間は産業主義的生活様式を排除する必要がある

③地域経済や社会的要求に応えた小規模生産に拠点を置き、自然との触れあいの多い非産業主義社会を創造することが進歩につながる

④一般市民は多くの決定に全員が参加する必要がある。専門家は市民に助言を与えるべきだが、不必要な権限や権力を持つべきでない

⑤将来的方策としては代議（議会）制民主主義がある

⑥強力な集権国家は国家経済や地球規模の経済、社会システムを機能させるのに必要。民主主義における法と秩序を維持するためにも必要

⑤将来的方策としては直接民主主義がある。大多数の合意による決定および代表者による決定

⑥国家は影響力を持つべきでない。地方コミュニティに必要な手助けに専念すべき。緑の社会では、人間は自由に自らを組織すべきだが、強力な環境保護法を持つ必要がある

(出典) Pepper, *Modern Environmentalism*, 1996.

### (3) 分析枠組の適用

では、既述のイデオロギーの5次元を環境主義に適用してみよう<sup>9)</sup>。①環境主義の認識的次元は、天然資源の合理的保全を通じて人間生活の質や持続性を守ることに焦点がある。環境主義は過剰人口、公害（汚染）、危険かつ有毒物質、人間の浪費性、地球的温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊などの問題に取り組んでいる。環境主義は無制限の経済発展に制約を課し、そうした制約は普遍的に適用可能であるとみる。②環境主義は人間社会が過去・現在・未来のエコロジ的生命体と密接に結びついているとみなす。環境主義の情緒的次元は、全世界の有限性を強調し、人類に対してその有限性を正しく認識し浪費より保全を行うように求める。環境主義は、利己主義や個人的利益の追求よりも人々の公共主義に訴える。グローバルな生物界はあらゆる人間の尊敬や崇拝に値するものである。③環境主義の評価的次元は次のようなものを意味する。すなわち、あらゆる生命体への評価、人類をグローバルな生態系との関係でとらえる謙譲の精神、人間生活の質への配慮、孤立主義的パースペクティブよりもグローバルなパースペクティブの尊重、グローバルな生物界に関する長期的展望、あらゆる形態の浪費への嫌悪、四季・気候・自然に関する美的評価、である。④環境主義の計画的次元は、アメリカに登場した様々な環境集団や組織から構成される。その起源は1892年のシエラクラブにある。これらの組織は、環境保護のために草の根的動員、教育、研究、訴訟、ロビー活動を行っている。環境組織は広範な立法を生み出すのに成功してきたが、そのなかで最も重要なものは次のものである。1970年の国家環境保護法。1970年と90年の大気浄化法。1980年の包括的環境的対応・補償・責任法。21世紀はこういった流れに沿ってその展開が期待される。⑤環境主義の社会基盤的次元は、近年とくに拡大した。環境主義は私益のイデオロギーではないので、また私益は資本主義社会に深く浸透しているので、環境主義は当初はかなり経済的に安定した人々、すなわち中間階級にアピールした。時の経過とともに、核汚染や他の汚染が目前のものとなるにつれ、環境主義は階級的垣根を乗り越えた。60年代の行動主義は、環境にもスポットを当て、若者、女性、マイノリティーを動かし、社会問題のために行動を起こさせた。グローバルな温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊などの問題が注目を集めるにつれ、すべての社会階層が環境問題に新鮮な関心を抱くようになった。

## 5 おわりに

結局イデオロギーは終焉しそうにない。「イデオロギー的対立や論争は、自由主義の最終的勝利とともに20世紀末に終わりそうにない。それは19世紀末に予見された社会主義の最終的勝利とともに実際そうならなかったのと同じである。イデオロギー終焉の論議は、逆にイデオロギー論争が活況を呈し、イデオロギーが持続的で終わりなき過程であることを示唆している」と言えそうである<sup>10)</sup>。

筆者がなぜイデオロギー論を重視するか。冷戦が終わってイデオロギーの終焉が言われているが実際そのようなことはない。常に人類や地球を前進させるイデオロギーが必要となる。ではそうしたイデオロギーとはなにか。それを見つけ出すことが喫緊のテーマである。その有力候補がエコロジズムないしエンバイロメンタリズムであろう。しかしこのイデオロギーはどの程度旧来のイデオロギーと比べてその資格があるのか。真のイデオロギーたり得るのか。ともかくエコロジズムを含めて人類の新たな指針となるイデオ

ロギー（理想）が必要な時代となった。人類はいったい何を目標せよいいのか。理想が不鮮明なのだ。その理想を模索する意味からも様々のイデオロギーを検討してみることは重要である。過去の理想の点検作業と将来の理想の模索。段階論を示せば、①人類のあるべき姿（理想）の提示、②その理想と現実の突き合わせ（→理想と現実のギャップの認識）、③対応策の提示（→新理想の追求）<sup>18</sup>である。

人類の理想的未来を考察する上で、不可欠のテーマが環境問題への対応である。とりわけ環境団体は、環境問題を20世紀末から21世紀初期にかけての人類にとっての支配的な政治的アジェンダとみなしている<sup>19</sup>。本稿では、環境主義をイデオロギーとみなして検討してきたが、実際はどのように理解されているのだろうか。例えば、環境主義が未来のイズムとしての資格が大いにあるとの主張がある。環境主義はイデオロギーとして認識すべきであり、マルクス主義と同様、哲学的・学問的基盤は強固であるとされる。「現代世界においてマルクス主義の終焉がもたらした空白をうめる本当に潜在力のあるイデオロギー候補を探るのであれば、環境主義はその資格十分のイデオロギーとして選定されそう認識されるべきである。環境主義の哲学的・学問的基盤や適性は、マルクス主義と同様よく備わっている。環境主義はマルクス主義との比較からだけでききとしたイデオロギーになる資格があるのではない。他にもその理由がある。すなわち、環境主義が人類の生き残りにとって最高の倫理的価値に訴えているからであり、また環境を保護しそれにより人類自体を保護するのに有益な新しい社会的政治的システムを創造する包括的プログラムを提示できる能力があるから。人類が自分たちの複雑で難しい問題に対する明快なイデオロギー的解決法を探し始める時、環境主義イデオロギーは絶望的人類が希求するイズムに確実になるだろう」<sup>20</sup>。

いずれにしても我々は、環境主義が将来どれくらい強力なイデオロギーになるのか予測できないが、研究対象としては非常に有意性のあるテーマであると言えよう。

#### 《注》

(1) 大学教育社編『現代政治学事典』ブレーン出版、1991年、54頁。

(2) Mostafa Rejai, *Political Ideologies. A Comparative Approach*, Second Edition, M.E.Sharpe, 1995, p.219. (3) *ibid.*, p.11.

(4) ①エコロジズム概念の使用文献（論文）：Andrew Dobson, *Ecologism*, in: Roger Eatwell and Anthony Wright(ed.), *Contemporary Political Ideologies*, Pinter Publishers, 1993. Andrew Vincent, *Modern Political Ideologies*, Second Edition, Blackwell, 1995. ②エンバイロメンタリズム概念の使用文献：Andrew Heywood, *Political Ideologies. An Introduction*, Macmillan, 1992. Mostafa Rejai, *op. cit.*, 1995. ③（新）ラディカリズム概念の使用文献：Ian Adams, *Political Ideology Today*, Manchester University Press, 1993. Stephen D. Tansey, *Politics: The Basics*, Routledge, 1995. 環境問題を改善するイデオロギーとしては、以上のような3種類の表記がなされている。

(5) Dobson, *op. cit.*, p.235. この論点の参考文献としては、次の2論文がある。拙稿「エコロジー思想への政治学的接近－『ローマ・クラブ報告』を中心に－」『阪大法学』第40巻第2号（1990年11月）、同「政治イデオロギーとしてのエコロジズム－理想と現実のバランスの中で－」『宮崎公立大学人文学部紀要』第1巻創刊号（1994年）。

(6) Andrew Vincent, *Modern Political Ideologies*, Blackwell, p.236.

(7) Rejai, *op. cit.*, pp.221-222. (8) *ibid.*, pp.222-224. (9) *ibid.*, pp.224-225.

(10) *ibid.*, pp.3-4. (11) *ibid.*, pp.4-10. (12) *ibid.*, pp.14-16. (13) *ibid.*, pp.17-18.

(14) *ibid.*, pp.187-188,190. (15) *ibid.*, pp.190-191.

(16) David Pepper, *Modern Environmentalism. An Introduction*, Routledge, 1996, pp.11-13.

(17) Rejai, *op. cit.*, pp.200-202.

(18) Andrew Heywood, *Political Ideologies. An Introduction*, Macmillan, 1992, pp.298-299.

(19) これに関しては、「エコロジズムの限界」の中で3者関係が明示されている。すなわち、イデオロギーとしてのエコロジズムの構成要素にはユートピア、ストラテジー、リアリティーがあるとされる。

Tim Hayward, *Ecological Thought. An Introduction*, Polity Press, 1995, p.199.

(20) Stephen D.Tansey, *Politics: The Basics*, Routledge, 1995, p.85.

(21) Aleksandras Shtromas, Ideological Politics and the Contemporary World: Have We Seen the Last of "Isms"?, in: Aleksandras Shtromas(ed.), *The End of "Isms"?. Reflections on the Fate of Ideological Politics after Communism's Collapse*, Blackwell, 1994, pp.224-225.

